

自由民主党中央政治大学院講演資料

現代日本への警鐘

国民文化研究会理事長

小田村寅二郎

Handwritten notes at the top of the page, including a date and some illegible text.

Vertical handwritten text in the center of the page, possibly a list or a column of data.

Handwritten notes at the bottom of the page, including a date and some illegible text.

現代日本への警鐘

一、はじめに

二、修身齐家治国平天家

三、国の独立とは何か、イデオロギーを
土台にしての独立論議はまちがっている。

四、個人とは、社会とは

五、科学とは、そして心の問題とは

六、誤解された歴代天皇についての一考察

1

2

4

9

11

20

一、はじめに明治以来百年、その間にいろいろな紆余曲折があったが、現在、日本は隆々たる発展をとげ、今後もそれを続けるであろう。しかし、この間、日本民族の主体性に基いて、西洋文化を吸収していたのではなく、どちらかというところ、西洋文化の絢爛さに眩惑されて無批判にうけ入れてきた感がある。今はそれを再検討すべき時であり、いわば、民族発展の過渡期ともいうべきであろう。その中でも特に気になることは日本の大学の学問――高等学校や中学校の学問もそれに関連していると思うが――特に人間とは、社会とは、ということを追求している文化系の学問というものがはたして学問という名にふさわしい展開をしているかということである。諸君はその大学をりっぱに卒業し、今や社会に一步をふみだして人生のコースにおいて祝福されるべき一段階にあるということができる。しかし、もし諸君が学問だと思っていたことが学問全体のある一部分にすぎなかったとすれば、ここでよほど考えをとりもどしていけないと、実社会とマッチしていなくなる。実社会というものは、非常に欠点だらけだということとは別として、人間が真剣に生き抜いている所であることはまちがいないのだから、その真剣に生き抜いている所で通用する学問をどれだけ諸君が学んできたか、あるいは通用するものはたくさんあるが、なほそこに

欠けるものがあるとするれば、この機会に十分考えをおしてみる必要がある。

二、「修身齊家治國平天下」

支那の古い言葉に「修身齊家治國平天下」というのがある。諸君から見れば非常に古く、さく思われるかもしれない。が、まア聞いて下さい。修身というのは、自分の行いを正しく修めるということであり、齊家とは、諸君が生れそだった家庭とやがて結婚して営むであろう家庭をよくととのえ、おさめることである。治國とは、國を治めるということで、その國というのは、お互いが日本人であるという意識に立って考えるべき立場を指し、治國平天下とはその國が治まって、はじめて天下が平らかになるということである。すなはち平天下、今でいえば世界平和というものは、修身、齊家、治國という順序で達成されるということを昔の支那人がのべたものである。ここにいう國とは、当時の支那における封建諸國、日本でいえば幕末までの藩に相当するものと考えればよい。従ってここでいう天下とは支那全体の意であり、現在では國は世界各国、天下は世界と解釈してよろしい。

さてこの修身、齊家などという言葉は非常に陳腐なもののように見えるが、実際には、今日諸君が社会に出る上において密接な関係をもつものなのである。例えば諸君は現在、りっぱな人間になろう、幸福な人間になろうと願っているが、それはこの修身によって、

はじめて達成されるところのものである。また、近頃はやっているマイホーム主義というのは、結婚して家をもち、それを豊かにしようという願いであって、それはとりもなおさず齊家ということである。このように考えると、諸君は、幸福になり、りっぱな人間になり、家庭をマイホーム主義で建設していこうとする修身、齊家という感覚をいやというほど頭の中にこびりつかせているはずである。

ところで諸君の学生時代にはげしく論争された社会主義か資本主義かという問題は、一体この中のどれに関連した問題なのだろうか。実は、社会主義がいいのか、資本主義がいいのかという問題は、何も一身一家の問題に関係したものでなくて、それはむしろ天下に関する問題なのである。なおそのほかに修正資本主義とか、修正社会主義、あるいは共產主義とかいわれるようないわゆる天下に関係した問題で諸君は学生時代に熱中して論議してきたと思われるが、このほかに、自分一身の問題及びマイホーム主義を合わせた三つの問題に関連して論議を集中したはずである。ところが自分一個人と家と天下の問題との間に国という問題があるが、これをどのように位置づけしてきたか。その考えがさまざなければ社会生活は営めないと思われるのである。

諸君は今、企業に入ったのであるが、企業体というのは国と家との間にある集団生活で

あって、諸君はその企業体から月給をもらい、ボーナスをもらい、それをもとにしてマイホームをきざりとしていのである。そうするとこの企業体社会というものはいやおうなしに諸君の一日二十四時間の生活のうち、場合によっては十五時間から十六時間、諸君を精神的、肉体的に拘束するかもしれない。諸君の生活の大部分は会社と取りくむことになるだろう。ところで諸君は家と身のため、マイホームのために会社につとめるのか、あるいは学生時代一生けんめい取りくんだ資本主義とか社会主義とかの問題を解決するために会社の生活をするのか。そしてそういうことを考えて社会に出ようとしているかどうか。なおもう一つ、つけ加えなければならぬのは、一体その会社と国との問題はどろろなっているのかということであるが、それを考えなければ政治のことを語るわけにはいかないだろう。国のことをぬきにして資本主義がいかにか、社会主義がいかにかいうことを論じてもはじまらないのではないか。結局、諸君の念頭には意識的に国というものが入っているはずであるが、生活姿勢としての分析ができていないのではないか。あるいは生活の中にいいかげんに放っているのではないだろうか。それが一番気になるところである。

三、国の独立とは何か、イデオロギーを土台にしての独立論議はまちがっている。

国の独立ということについて一つの例をあげれば、日本は一つの国家を形成しているから、日本人ならば誰でも日本の独立ということを念願していてこれは問題ない。ところで諸君は一身の独立を願って会社に入り、やがて人の世話にならずにマイホームを作りたいと思っているが、ここに独立の思想が確認されるわけである。同じように国の独立にしても、自分自身を考え、家を考える感覚を確立しているものならば、民族国家が独立しているかなければならないということぐらいは問題にならないはずである。そこで日本の独立ということに眼をむけてみるとアメリカその他自由主義国の仲間入りをしているが、ある仲間の一員であることと、仲間の中で独立を達成しているということとを混せて考えるわけにはいかない。日本は自由主義国の一員である。従って資本主義体制、あるいは修正資本主義体制の中に経済なり、その他の社会体制を運営している。だから自由主義諸国と、仲良くしていくのは、当然である。

しかし仲よくすることは当然であるとしてもその中であっても独立の精神を失ってはならないのは当然である。ここにいう独立の精神とはどういうことかというところ、例えばアメリカとか、イギリスあるいはヨーロッパのEEC諸国、台湾、韓国その他の国々と綿密な仲間づきあいをしていながらも、強いからといってその国に隷属したり、弱いから、後進国だからと

いって、その国に横暴なふるまいなどをしたくないということであるといつてよい。そういう意味で日本が自由主義国家群とつき合いをする上において、アメリカやその他有力な国に対して卑屈にならないことと、台湾、韓国、東南アジアなどの諸国に対してはいばりくさらないということ、この二つがらつぱに確立された時に日本の独立がらつぱなものとして達成されていくのである。

ところがそれと関連して、アメリカに日本が隷属されているかの如くいつて、アメリカからの独立を叫んでいる人たちがいる。左翼の諸君は、日本が自由主義国家群に仲間入りしているのが気に入くないのだから共産主義陣営、社会主義陣営に仲間入りしたいという仲間意識をもっている。しかし、そういう仲間意識にたつからといつて、その中でのどれかに隷属するような卑屈な態度で独立の精神を失っていたのでは、日本がアメリカに隷属しているかのようにいうのはまことにちぐはぐなおかしなことになってくる。だから日本はアメリカの隷属から脱せよという左翼の諸君の独立ということが、そのまま社会主義国家の仲間入りをする方便として使われている言葉である限り、その独立というのは何の値打ちもないのである。このような値打ちのない独立の声に日本のインテリや学者、あるいは政治家、評論家などがひきざりこまれ、それによつて独立が達成されると思ひこんでい

るとしたら、これはとんでもないまちがいである。社会主義諸国に対しては隷属することを何とも思わずに、自由主義諸国に対しては仲間入りするだけで、そのどれかに隷属するかの如く非難する論理はどこから湧いてくるのであるうか。それは簡単にいえば、天下の問題、社会主義がいか、資本主義社会がいかという問題を先に論じているからである。結果にほかならない。すなわち国という問題を抜きにして、天下の問題を先に論じているから、社会主義社会の方がいいのだと断定するものは国も社会主義になれといい、資本主義社会がいいというものは、資本主義国家になれというのであろう。天下の問題を先に論じて、逆に国家の問題を制約しているわけである。

ところが国家というものはそんなものではない。イデオロギーとかはあってもなくても国家というものは成り立つ。諸君や我々の家庭にしてもイデオロギーなどに一生しばられて満足するわけにはいかない。夢をイデオロギーに託する人はいても、自分の生活一切をかけて、イデオロギーの奴隷になることで満足できる日本人はいないはずだ。それは日本人というのは、これだけ美しい自然と四季の風景の中にきたえられているのであるから、そういう殺伐なイデオロギーなどに自分の豊かな心情をたくするなどということにはがまのできない民族だからである。自分の一身をとってみても独立したいということを経験

的にもっているのだから、それから類推して冢も独立して、その集団である国も独立しようというのが我々日本人の国の独立に対する考え方なのである。社会主義とか資本主義とかいう社会体制の問題は、時代の変化と共にさまざまに影響されるものであるから、日本の独立は資本主義国として独立しているなどと言う言い方は全くうそである。だからやがて日本の資本主義社会を崩壊させて社会主義社会の国にするなどということも口先だけのことであって、日本民族の独立は社会主義にも資本主義にも関係がないのである。日本人の一人一人が独立しようという意思をもち、自分の家庭は人の世話にならないで生きていくという決意がある限り、日本の独立は確立されていくものである。

ところで諸君はそういう意味の国の独立というものを本当に考えてみたことがあっただろうか。おそらく、資本主義とか社会主義かという方ばかり夢中になり、一方では個人と自分のマイホームのことに心を奪われ、国のことはお留守になってどちらに結びつけていか迷いながら今、社会に出ようとしているのではないだろうか。

そこでこのような日本人の独立精神の喪失は一体何に原因したかを考えてみなければならぬ。ある人々は日本が前の世界大戦においてみじめな敗戦をしたので、それによって独立の自信を喪失したと説明する。それも確かに原因の一つだろうが、もっと奥深い所に

その原因がありはしないだろうか、それを考えてみたいと思う。

四、個人とは、社会とは

まず第一に、諸君は、戦後うけた教育から、個人を大切にしなければいけない、ということと、個人と社会の関連を考えるようなことが、学問の中心だと思ってきたのではないか。しかし実際よく考えてみると個人というものは、はたして実在しているものなのだろうか。例えば私という個人というものがあるようにみえるけれども、私は、私を生んでくれた親、父や母に対しては子という立場である。また妻に対しては夫という立場である。私と妻の間に生まれた子供に対しては、父親という立場、私のいところに対してはとこという関係、学校の先生に対しては弟子という立場である。そういう形で私という一人の人間の抽象的な表現は個人で通るけれども、個人というものは抽象されたものであって一つの具体的なものではない。その立場は無限にあって、ざっと数えても百ぐらいでくる。しかしそのどれを一つ取ってみても二人の人間の関係でしかない。父とわが子という具体的な対象になる、少くとも二つの中にある一つであって、それ以外の人間、個人などという具体的なものはどこにもないのである。だから我々が人間として生きている姿は、

人間と人間の中の結びつきの糸を一人の人間が五十も百も持っているということである。したがって相手に対してさまざまな言葉、例えば敬語なども二十種類も三十種類も使える人間なのである。親に対し、子に対し、あるいは会社の社長や係長に対して、それぞれちがった言葉を使うのである。

このように一人の人間がいくつもの人間関係をマスターして社会を作っているのではなく、そこに個人という抽象的なものが成り立つのである。いわば単なる個人というものは実在しないと極論してもいいのである。

これは抽象的に言ったまでのことで、具体的には人間と人間の関係の二対一で、その二対一の相手の一はさまざまなものであって、そこに実在する人間が発見できるであろう。もし我々が社会の問題、天下の問題を考えていくならば個人というものは宙に浮いてしまっているのではないか。だから我々でも諸君でも家庭を建設する時に、あるいは会社の中で円満な勤めをはたそうとする時、抽象化された個人の権利を主張したり義務を論じたりしてもらいが必要なのではないか。単なる個人という線だけで天下を論じ、社会体制を論じ、社会機構を論じ、経済機構を論じていても何の役にも立ちません。何かの参考になるだけで天下を動かすことにはならない。

そこで抽象化された個人という言葉や、社会という抽象化された言葉で個人と社会の關係がどうかなどといっても意味をなさないのである。ちなみに社会とは、我々の所属している市や町、諸君の勤め先きの会社、クラスメートなどもみな社会であり、一人の人間はこれら無数の社会に所属しているわけで、社会という一つの抽象化された言葉にすぎない。そこで、このような抽象的な社会でなく、自分の所属している、あるいは自分が誓いをたてた社会を具体的に考えて、そこに社会があるんだと考えればいいわけである。諸君が会社に入る時入社誓約書を書かされ、それによって会社の一員になることを自分の署名で確認したのであるから、当然会社の一員であることが確定するのである。同時に諸君が親と一緒に生活しているとすればその家庭の中の一員でもあり、社会に出て年をとっていくうちに、自分の所属する社会というものはたくさん出てくることになる。このように、抽象化された問題と具体的に指摘された問題を整理して、社会に臨むべきだと思ふ。

五、科学とは、そして心の問題とは

次にもう一つ考えなければならぬ問題は、現在科学という言葉が大変流行して、科学でなければ学問でないかのような錯覚に諸君がおちいつているのではなにかということ

ある。諸君は科学的というといかにも学問的であるかの如く教えこまれ、それを信じてきたかもしれないが、それがまちがいののである。なぜ、まちがってかそれを説明しよう。

一体科学とはどのような学問で、その本質は何なのだろうか。もともと科学は、はじめ西洋におきたもので、東洋で発達したのではない。また西洋で発達してきた学問の中には哲学というものもあった。この哲学という学問も、人間が人間の感覚にたよって物を判断することはいけないというよりな考えから、もっぱら理性にたよろうとした学問である。感覚というものは眼からする視覚、耳による聴覚、鼻の嗅覚、舌で味わう味覚、それから手と足でさわる触覚とがあってこれを五感（官）という。この五つのものが働いて人間が判断するのを感覚というが、この感覚にたよってものを判断すると、まちがいがおこり易いというので、もっぱら理性にたよって真理を探究していこうということを考えだしたが、西洋の哲学だろうと思う。この西洋の哲学の中から科学が発達してきたのであるが、理性にたよる哲学はどうしても頭の中で観念的に考えるということになるから抽象的である。そこで抽象的なものでなく、もっと具体的に人間の経験したことをそのまま整理していこうではないかという所から科学がスタートしてきたのである。抽象的、理念的なまぼろしを追うというような哲学では本当のことはわからない。哲学は真理を探求しようとし

てかかったものであるが、そのような真理の探求は哲学にまかせ、科学は真実の探求にかかったのである。大学がもし科学の祖であるならば、大学は真理探求の場所ではなく、真実を探求する場所でなければならぬはずであろう。

科学は抽象的なまぼろしを追うのをやめて、人間の日常平凡な経験をたんねんに観測し、それを記録していったのである。そして集積、分類、整理し、その分類の中から研究分野をたくさんに分けていって、その一つ一つの中で何らかの原則性を機能的に発見する努力をして着々と進歩してきたのである。例えば初め太陽が東から出て西に沈むのをずっと見ていた所が、毎日同じように動いていくということから、そこに科学的解明を加えて、一日の時間というものを考えだしたのである。このように科学は人間の経験をつみ重ねてできたものであるが、科学ですべてのことができたわけではないし、今後もその通りであろう。そこに一つの問題がある。というのは、研究した結果を記録に書きあげなければだめだということであるが、自分自身がそう思ったということは記録にはならないし、表現できないからである。科学の対象は表現できることと、記録に書くことのできるものでなければならぬ。医者であればカルテに書ける内容までが、科学の対象なのである。医者は患者の腹痛を聞いて激痛とか、微痛とか、あるいはかすかな痛みとかカルテに書い

ていると思う。ところが日本語の中にはおなかの痛いことを表現する言葉がたくさんある。きりきり痛むとか、しくしく痛むとかさまざま痛みがあるが、そのきりきり痛むとはどういうことかという定義をつけることができない。

赤い花が咲いていたとする。赤い花ということは科学の対象になるのだが、その赤い花は私に快い感じを与えるが、諸君のだれかには不快な気持を与えるかもしれない。このような色彩感覚は客観的は証明できないのみならず永久に説明できない。温度にしても同じである。例えばおしぼりにしてもそれが冷たいタオルか、あついタオルかは科学で説明できる。しかしこの冷たさが私に快い感じを与えるのか、不快な感じを与えるのかは説明のしかたがない。私にわかって、諸君に私が感じたように説明することはできない。

このように人間が生活し、経験しているなかには、ものに書いて示すことのできないものがたくさんある。ものに書いて示すことができるものだけが、科学の対象になるので、科学というものはそのような範囲の中にしか動けないものなのである。どんなに科学が発達しても、あくまでもAという学者の研究した成果が記録によって書きあらわされ、それをBという学者が読んで、次の研究を行ないBの収穫にしていくということではなければ科学にはならないのである。

そこで人間が経験しているものの中で、書き表わされるものだけが科学の対象であるといふことがわかるだろう。そうすると人間の心などというものはどこにいくのであるうか。人間のうれしさ、悲しさとかという言葉だけは科学の対象になるかもしれない。しかし、しみじみとしたうれしさとか、耐えられない悲しさに沈んだとかいう人間の感情をいくら書いてみても、それがその人の感覚のように第三者に理解させることは不可能だろう。恋愛などというものも同じで、科学の対象にならないのである。昨日Aという男がBという女性を見て、一目惚れをしたということは、何ら科学的根拠がなく、突然変異のように発生してくるものである。これは心の作用である。よくお互いの心の琴の糸、心の琴線がふれあって仲良くなったとかいうが、これは全然科学の対象にはならない。客観的ではなく主観的なものだからである。

先きほども述べたように、科学は哲学のような抽象的な真理の探求を遠ざけ、具体的な人間の日常の経験をつみ重ねて、その進歩をはかってきた。抽象的なものを排し、具体的なものを正確につきつめてきたものが科学だったのである。そのようにして、歴史の学問とか、思想に関する学問のなかにも科学的思考法とか、科学的研究法とかいうことをどんどんとり入れてきた。現在の教科書裁判などもそのからみ合ったものである。家永教授は科

学的方法で歴史を研究していると言っているのだから、本来科学的なものとは抽象的な考えを排して、具体的なものを求めていく態度でなければならぬ。しかるにその科学的な立場でものを言うという社会学者が個人とか社会とかいうことばかり言っているではないか。それは具体的なものではなく、最も抽象的な漠然とした不正確な言葉ではないか。個人と社会で社会学が成立しているこの学問は一体なんなのか。しかもそれが科学的だと言っているにいたってはうそ八百もはなはだしいといわなければならぬ。

科学というものはそうではないはずだ。具体的な人間の経験をつみ重ね、正確に記録、分類、整理して、さらにその中から機能的なものを引き出すのが科学ではないか。ことに人文科学や社会科学にいたってはもっとも抽象的で内容のわからないものである。具体的にさがせば、父とか子とか先生とか、こういう人間が百も持っている個人関係があるのにそれをまとめ、抽象化されたものをひっぱり出してきて科学だといっている。社会についても同様である。社会というものは、一人の人間が具体的に十も二十も三十も、経験して持っているにかかわらず、それをすべて社会という言葉一つにしぼって抽象的に考えていて、それがなぜ科学の対象になるといえるのであろうか。だから今日の社会学も人文科学もあと三十年五十年したら、がたがたにひっくり返ってしまいうだろう。基本的に忠実ではないか

らである。抽象的であってはいけない、そして主観も排除しろというのが科学の原則である。それがどういりわけか人文科学、社会科学の面においてはおかしなことになってきてしまっている。

そこで歴史観の問題にしろ、あるいは資本主義だ社会主義だという論争の基本となる個人と社会という感覚は、一体科学的立場に立っているのか、哲学的立場に立っているのか、もう一度考えてみる必要がある。マルキシズムは科学的思想だとマルクス自身も言い、その祖述者達も言っているが、一体それはどうして科学的たりうるのであろうか。同時に、前述したように、大学の学問というものが科学的、科学的にというものの中に入りこんできているが、科学でない学問というものも人間の生活の中にあつたということを確認してもらいたい。要するに客観的な真実、誰にでも説明することができ、納得されるものはすべて科学の対象になっている。

しかし自分だけにしかわからない心の問題、その心の問題の中にもこれが真実だと思ふものがあるはずだ。恋愛などもこれで、何も伊達や酔狂で恋愛しているのではなく、主観的ではあるけれども、自分の心の中で本当にあの人が好きだと思ふからであつて、それはその人にとっては真実なのである。だから真実というのは、科学の対象にあるものだけが真実ではないので、科学の対象にならないものの中にも人間が生きていく上の真実という

ものがある。東洋では古来それを真心とか誠とか言ってきた。その真心というものを心の中に一層鍛えていこうとしたのが、明治維新に至るまでの千何百年あるいは二千何百年の日本人の生活だった。主観的な真実というものを磨き、鍛えようとしたわけである。それが自分の一身であり、家であり、また国であって、それらをみな含めて、科学でない主観的真実の世界で確認しようとしてきた学問が東洋や日本にはあったのである。だから客観的な真実を追求する科学、そこから抽象的ではあるが真理を探求しようとする哲学、それともう一つ学問の大きな要素をなすところの人間の真心を鍛え、たしかめあっていく学問、この三つが成立してこそ初めて大学の学問は成り立つのである。しかるに今の大学でその最も肝心なものが脱落しているからこそ、個人とか社会とかいうような抽象的な言葉を最も科学的な言葉だと錯覚してしまったのである。大変な混乱ではないか。科学は理詰めで物を理解していく。諸君はその科学についての学力は非常なものと思われるが、もう一つの学問、人間にとってはそれが無いと人間社会の向上は勿論、人間自身の進歩もとまってしまうところの学問、すなわち眼、鼻、耳、舌、触覚の五官をすべて働かせながら頭も使ひ、全身を統一的に動かして、直感的な判断をくだす学問に欠けていると思われる。頭だけで理解するのが知識的な学問であるが、それだけではだめなのでもっと全身的なものを

働かせていかないと直感の機能は働かされていかないのである。

このようにして日本人は、自分自身を鍛え、外国のあらゆる思想に順応する能力を自分の身につけてきたのである。日本人が利口であったか馬鹿であったかは別として、人に対する時は、親であれ、子であれ、あるいは先生であれ妻であれ、常に人間対人間の関係の中で、相手を理解するために、自分にとらわれない、おのれをむなしゅうした状態で相手の中に飛び込んでいく。だからあらゆるものを判断する力が直感的に身につけてきたのである。逆に言えば、個人という意識を忘れてはいないが、それを先立てることを慎しんで相手の中に自分を生き返らさることに努力した人達ではなかったろうか。このようにして我々は、諸君と共に学んできた長い年月の中で我々自身が身につけた個人というものから、ここで大きく脱皮し、もっと価値の大きい、スケールの大きな個人に我々自身を作り変えていかなければならないのではないか。例えば諸君が結婚する場合、いくら顔がきれいだからといって、結婚の相手が自分のことしか考えないような人であったならば、その夫婦生活が長く続かないのは当たり前のことである。同様に会社の上役、同僚にしても相手に真心がなければ、お互いにうまくいくわけがない。人間はお互いという密接な関係の中にいる。それを個人と個人が対立したものととして境界をはっきりさせようとすれば、この人間関係は

消滅してしまふ。だから相手の中に自分を投入する場合、自分というものは価値のないつまらないもののようになって消えてしまふような人はおかしいので、自分は消えるどころか、逆にいよいよ経験豊かな立派な人間として生きていくものこそ価値ある人間といえよう。

以上のように、今日の社会には、幾多の大きな誤りが放任されたままであり、大学生活もそのような意味においては、けっして完備されたものではない。建て物に欠点があるとか、マスプロ教育に欠点があるとかいうような通俗的な問題ではなく、もっと本質的に重大な問題をしよっている時代に、お互いにきていると思うのである。

六、誤解された歴代天皇についての一考察

最後に諸君のみならず今日の教育界においては、天皇のことにふれると、なにかふるくさいことを言っているというように思つて相手にしない風潮があるが、その度があまりにひどすぎるので私が少し調べたことを次の表をもとにして申しあげてみたい。

第29代欽明天皇以降の天皇の御在世・御在位等について

46-1-23 記 (小田村寅二郎調べ)

(代数が○であるのは女帝であられる)

(踐祚) 御即位 西曆	何代 天皇御名	(数え年)			御在位 年数	院政の 期 間	(数え年) 崩御 御年令	備 考
		踐 御 年令	祚 年	退 位 令				
539	29	欽明	31	63	33		63	
572	30	敏達	35	48	14		48	
585	31	用明	67	69	3		69	
587	32	崇峻	68	73	6		73	
592	○33	推古	39	75	37		75	
629	34	舒明	37	49	13		49	
642	35	皇極	49	52	4	重祚して齊明天皇		
645	36	孝德	50	59	10		59	
655	○37	斉明	62	68	7		68	
661	38	天智	48	58	11		58	
671	39	弘文	24	25	2		25	
673	40	天武	52	65	15		65	
686	○41	持統	42	53	12		58	
697	42	文武	15	25	11		25	
717	○43	元明	47	55	9		61	
725	○44	元正	36	45	10		69	
734	45	聖武	24	49	26		56	
749	○46	孝謙	32	41	10	重祚して称徳天皇		
758	47	淳仁	26	32	7		33	
764	○48	称徳	47	53	7		53	
770	49	光仁	68	73	12		73	
781	50	桓武	45	70	26		70	
806	51	平城	33	36	4		51	
819	52	嵯峨	24	38	15		57	
823	53	淳和	38	48	11		55	
833	54	仁明	24	41	18		41	
850	55	文徳	24	32	9		32	
858	56	清和	9	27	19		31	
876	57	陽成	9	17	9		82	
884	58	光孝	55	58	4		58	
887	59	宇多	21	31	11		65	
899	60	醍醐	13	46	34		46	
930	61	朱雀	8	24	17		30	

(踐新) 御即位 西曆	何 天皇	代 御名	(教 え年) 踐 御年 令	(教 え年) 退 御年 令	御 在位 年 数	院 政の 期 間	(教 え年) 崩 御年 令	備 考
946	62	村上	21	42	22		42	
967	63	冷泉	18	20	3		62	
969	64	円融	11	26	16		33	
994	65	花山	17	19	3		41	
996	66	一条	7	32	26		32	
1011	67	三条	36	41	6		42	
1016	68	後一条	9	29	21		29	
1036	69	後朱雀	28	37	10		37	
1045	70	御冷泉	21	44	24		44	
1068	71	後三条	35	39	5		40	
1072	72	白河	20	34	15		77	
1086	73	堀河	8	29	22		29	
1107	74	鳥羽	5	21	17		54	
1123	75	崇徳	5	23	19		46	(讃岐)
1141	76	近衛	3	17	15		17	(保元の乱)
1155	77	後白河	29	32	4		66	
1158	78	二条	16	23	8		23	
1165	79	六条	10	13	4		13	
1168	80	高倉	8	20	13		21	
1180	81	安徳	3	8	4(6)		8	
1183	82	後鳥羽	4(5)	19	16(14)	(83-5) 24	60	(隠岐)
1198	83	土御門	4	16	13		37	(土佐阿波)
1210	84	順徳	4	15	12		46	(佐渡)
1221	85	仲恭	4	4	4ヶ月		17	(承久の変)
1221	86	後堀河	10	21	12		23	
1232	87	四条	2	12	11		12	
1242	88	後嵯峨	23	27	5	(89-90) 27	53	
1246	89	後深草	4	17	14		62	
1259	90	龜山	11	26	16	(91) 14	57	
1274	91	後宇多	8	22	14		58	
1287	92	伏見	23	34	12		53	
1298	93	後伏見	11	14	4		49	
1301	94	後二条	17	24	8		24	
1308	95	花園	12	22	11		52	
1318	96	御醍醐	31	52	22		52	
1339	97	後村上	12	41	30		41	
1368	98	長慶	26	41	16		52	

(踐祚) 御即位 西曆	何代 天皇御名	(数え年)		御在位 年数	院政の 期間	(数え年) 崩御 御年令	備考	
		踐 御 年令	退 年 位 令					
1383	99	後龜山	37	46	10		78	
1392	100	後小松	16	36	21		57	
1412	101	称光	12	28	17		28	
1438	102	後花園	10	46	37		52	
1464	103	後土御門	23	59	37		59	
1500	104	後柏原	37	63	37		63	
1526	105	後奈良	31	62	32		62	
1557	106	正親町	41	70	30		77	
1586	107	後陽成	16	41	26	(108) 7	47	
1611	108	後水尾	16	34	19		35	
1629	○109	明正	7	21	15		74	
1643	110	後光明	11	22	12		22	
1654	111	後西	18	27	10		49	
1663	112	靈元	10	34	25	(113-4) 46	79	
1687	113	東山	13	35	23		35	
1709	114	中御門	9	35	27		37	
1735	115	桜町	16	28	13		31	
1747	116	桃園	7	22	16		22	
1762	○117	後桜町	23	31	9		74	
1770	118	後桃園	13	22	10		22	
1779	119	光格	9	47	39	(130) 24	70	
1817	120	仁孝	18	47	30		47	
1846	121	孝明	16	36	21		36	
1867	122	明治	16	60	46		61	
1912	123	大正	34	48	15		48	
1926	124	今上	26					

表は第二十九代欽明天皇以降、今上天皇に至るまでの歴代天皇の御在世、御在位などをしてしるしたものである。諸君が社会的な知識から身につけた天皇の印象が権力をその一手に握り、国民をおさえつけて勝手なことにしてこられた、といったようなものであったかも知れないが、この表でそれを解明してみたいと思う。

まず最後に近い方百二十一代の孝明天皇、そのお一人前の百二十代仁孝天皇、この幕末のお二人の天皇についてであるが、仁孝天皇は十八歳で位につかれて、四十七歳でおなくなりになっており、孝明天皇は十六歳で即位され三十六歳でおなくなりになるまで在位されている。明治天皇も十六歳で天皇になられて、六十一歳でおなくなりになるまで、また大正天皇もおなくなりになるまで在位されている。これからみて、現代に近い四人の天皇方は、いずれも終生天皇として御生活をされたことが明らかである。それからずっとさかのぼって第五十代桓武天皇以前の天皇も大体、おなくなりになるまで在位されている。そして即位されたお年が欽明天皇から桓武天皇まで、それぞれ三十一歳、三十五歳、六十七歳、六十八歳、三十九歳、三十七歳、四十九歳、五十歳、六十二歳、四十八歳、二十四歳、五十二歳、四十二歳、十五歳、十歳の文武天皇が一番お若いほかは、桓武天皇に至るまで全部成人されてから天皇になられ、おなくなりになるまで存位されている。そうす

ると最近の仁孝、孝明、明治、大正、今上天皇と桓武天皇以前の天皇はいずれも即位から崩御まで在位されたことになり、その間ずっと実権を握っておられたといふことができる。真に天皇として統治の大権を完全におもちになっておられたかどうかは別として、少なくとも御在位年数と御年とからだけみると、右のようにみることがができる。しかし、それ以外の天皇の実態はどんなものであったかを理解するため、諸君もすでに学んできたことであるが、三十三代推古天皇以降、歴代天皇時代の歴史について簡単に説明しておきたいと思う。三十三代の推古天皇の時代がいわゆる飛鳥時代であって、四十二代文武天皇までを飛鳥白鳳時代と総称し、その間に三十八代天智天皇の時に大化の改新が行なわれている。四十三代元明天皇から四十九代光仁天皇に至る約七十年間が「あおによし奈良の都は咲く花の……」とうたわれた奈良朝時代で、つづいて五十代桓武天皇以降約四百年間が、平安時代であって、その間に、藤原時代、摂政関白時代と呼ばれた期間があり、最後に平氏が出てきて安徳天皇を奉じて西海に沈むあたりから鎌倉幕府時代となる。そこで鎌倉時代から明治維新までが約七百年間、それに平安時代の四百年間を加えた千百年間の天皇の御年令をみてみると、五十一代の平城天皇が三十三歳で即位され、在位わずか、四年、三十六歳で退位され、そのあと五十一歳まで生存されている。次の嵯峨天皇は二十四歳から三

十八歳まで存位、五十七歳まで生きていられる。五十八代光孝、六十代醍醐、六十二代の村上の各天皇は御存命の最後まで在位されたが、この頃から藤原の摂政、関白時代となり天皇即位のお年が表でみる通り十三歳、八歳、二十一歳、十八歳、十一歳、十七歳、七歳九歳となり、堀河天皇は八歳、鳥羽天皇五才、崇徳天皇五歳、近衛天皇三歳、そして御退位の御年齢もお若いという時代になってきている。このようにみてくると、藤原の摂政関白時代の天皇の地位、実力及び政治的な権力がどのようなものであったか、ほぼ想像がつくであろう。そして平家の時代最終期の二条、六条、高倉、の三天皇とも二十歳前後で全部おなくなりになっている。諸君より若い年で即位され、いかに天皇の位にあったからといって政治的な実権を持って勝手なことができたかどうか、諸君の年令で考えてみたらわかるであろう。

次は鎌倉時代になってくるが、この頃（執権北条義時）になると、後鳥羽上皇が隠岐に順徳上皇が佐渡に、それぞれ流されている。承久の乱の結果であるが、この三天皇とも四歳で即位され、それぞれ十九歳、十六歳、十五歳で退位されている。このようなことから鎌倉幕府時代の天皇の地位がどのようなものであったか想像するにかたくない。さらにはずっと見てくると建武中興をなされた九十三代後醍醐天皇、九十七代後村上天皇、九十八代

長慶天皇、この三天皇はほぼお年をまっとうして位についていられるが、これらの南朝の天皇は足利の建てた北朝の天皇が平安の宮におられたのに反し、吉野の山の中を転々として逃げ隠れなされるようにして、まともな御所もお持ちにならず山の中でお過しになった天皇である。また御長命でかなり長期にわたり在位されたが、日本全体の中心にたつて天下に号令したというわけではなかった。

このような南北兩朝対立の状態から百代北朝の後小松天皇の時に、南朝の御龜山天皇の位を継がれて、ここに南北統一ができあがったのであるが、それから以後、百二代後花園天皇以降、百三代、百四代、百五代にわたる天皇に至っては、日常生活にも窮乏されて、お召物、召上りものにもこと欠かれたといわれている。殊に歴代天皇が古来長く続けられてきた宮中のさまざまな儀式なども行なうことができず、お位を継がれても即位の式をあげる経費がなく、十年も二十年も待たなければいけない時期があった。その後百六代正親町天皇、百七代後陽成天皇あたりが織田信長、豊臣秀吉が登場する戦国時代であるが、百八代後水尾天皇以降は徳川家康が天皇の実権をことごとくめし上げるといふ方針のもとに宮中の生活に制約を加えるようになった。このような形で約千百年の間の天皇は、諸君のイメージとはおよそほど遠い状態のもとにその地位をたもってこられたというのは一体ど

う解釈したならばいいか。金と権力その上武力をようしていた天皇というのは西暦七八一年桓武天皇以前の天皇と百二十二代明治天皇以降だけなのである。そして、それとは全く正反対の天皇がその中間の千百年間続いていて日本民族はそれらの天皇を大切にしてきたというのは何を意味するのであろうか。少くともこの千百年の間に権力と金力と財力をもたなかった天皇が続いていたということの証明を右の表が物語っているように思われる。こういう真実をみても、なお今までまちがって教えられてきた学者達の意見に諸君は魅力を感じるというのであろうか。

以上に述べたように、権力も地位も金力もない天皇が日本の国民の生活の上に御心をよせられ国民の豊かな生活と、やすらかな生活を念じ続けておられたという事実は、歴代天皇が残されたお歌の中にあふれ出ているのである。それらを研究の対象から除外し、そのような天皇の御心など少しも考えず、ただ地位と形式とだけを研究して、それが科学的だと言っている。日本の大学が心と言うもの、人間の主観的な真実というものを学問から除外した結果、天皇に関する研究が単に形式的な地位などにこだわって、それ以外のことは学問の対象として出てこなくなってきたのである。このように千百年の間、天皇の権力と地位が空白化している時に、日本の民族が天皇を大切にしてきたのには、それなりに

何らかの理由がなくてはならない。それを究明する学問を現在の日本で、誰がやっているというのであろうか。いないのである。しかもその天皇のことが今の憲法の第一条に出ているのではないか。すなわち天皇は日本国民統合の象徴であると書いてある。憲法の改正問題も重要な問題であるが、憲法の第一条に明記してある天皇が、何ら学問の対象になっていないのはなぜか。それは学問ではないと思っっているからである。すなわち科学的なもの以外は学問でないという迷信から抽象的なものをもって科学的であると錯覚している結果天皇の問題が度外視されているからである。

(附記、なおこの「第六、誤解された歴代天皇についての一考察」については、今年八月月中旬ころに時事通信社から出版を予定されている小田村寅二郎編「新輯日本思想の系譜——文献資料集」に「歴代天皇のお歌とその時代背景」と題して詳しく記載されているので参照されたい)

